

川西利衛氏「学徒出陣」

[解説]

本稿は、大阪高等学校在学中の1944年9月に海軍に入隊し、入隊中に京都帝国大学法学部に入学した川西利衛氏に行った聞き取りの記録である。

川西氏の略歴は以下のとおりである。

1925年9月20日	大阪市生まれ
1942年3月	大阪府立市岡中学校卒業
1942年4月	大阪高等学校入学（文科2組）
1944年9月	同上卒業
1944年9月	海軍第15期飛行科予備学生に採用され、土浦海軍航空隊入隊
1944年10月	京都帝国大学法学部入学
1945年8月	復員
1946年4月	京都帝国大学法学部復学
1948年3月	同上卒業
1948年4月	合同新聞社入社

聞き取りは、2023年7月24日に岡山市東区の川西氏宅において実施された。当日の聞き取りおよび録音、記録の文字起こし、解説と註の作成は、いずれも西山伸（京都大学大学文書館教授）が行った。

川西氏が入学した大阪高等学校は、1921年に大阪府東成郡天王寺村（現大阪市阿倍野区）に設立された官立3年制の高等学校である。文科に甲類・乙類、理科には甲類・乙類・丙類が設置された（甲類は第一外国語を英語、乙類は独語、丙類は仏語とする学級。1942年に甲類は1組、乙類は2組、丙類は3組に改称された）。

なお、1941年11月1日公布の文部省令第81号「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ昭和十七年度臨時短縮ニ関スル件」によって、高等学校の1942年度卒業生（1940年4月入学者）は修業年限が2年半に短縮された。この短縮は1942年4月入学生まで継続するので、川西氏の修業年限も2年半となっている（川西氏の1学年下の入学生から高等学校の修業年限はさらに半年短縮されて2年となった）。

川西氏は、のちに大阪高等学校在籍中の思い出を次のように記している。

何ととっても大高の三年間がなつかしかった。軍国主義のお先棒をかつぎ戦闘帽・国民服でしかめっ面をしていた佐々木喜市校長。生徒主事の立場上これに追随していた高橋幸太教授。時流に乗って素頓狂な声を発していた宮本留六陸軍中尉。この流れに勇敢に反抗していた五十嵐達六郎・桑原武夫教授。一見弱々しく見えるが一本シンの通った自由主義

者の森三樹三郎・野田又夫教授。等々……〔中略〕

三年生のとき信太山の陸軍演習場で泊りかけの教練があった。私は不寝番をすっぼかして教官からこっぴどく叱られた。それは覚悟の上で何ともなかったが、驚いたことに数日後校長室に呼び出された。校長みずから叱るのである。たかが教練という一教科のために。私は校長が語調を強めれば強めるほど、彼の人格に対する不快感を強めていた。

これに比べ前記四教授の反抗ぶりは痛快だった。とくに大詔奉戴日（政府は毎月八日をこう決めて男にはゲートル、女にはモンペをはかせ戦意昂揚をはかっていた。黒船以来の時代劇喜劇がまだ続いていたのである）に五十嵐・桑原両教授が半ズボン姿で現れたときには惜しみない拍手を送った。私も大詔奉戴日にマントと下駄で歩いて警官にとがめられたことがある。黙っておればよいのに「ゲートルを巻いたら戦争に勝てるんですか」といらぬ口答えをして警官を怒らせ、ついに此花区朝日橋警察署の未決へ放りこまれてしまった。釈放され帰宅したが父は何もいわなかった。「ゲートル巻いて戦争に勝てるか」というのが父の口癖だったのである⁽¹⁾。

当時の高等学校の雰囲気だけでなく、川西氏本人や家族の時代認識がうかがえるエピソードである。

川西氏が大阪高等学校に在学していた1943年10月2日に公布された「在学徴集延期臨時特例」（勅令第755号）により、それまで高等教育機関の学生生徒に適用されていた徴集猶予が停止されることになった。いわゆる学徒出陣であり、多くの学徒が同年12月に陸海軍に一斉に入隊した。高等学校については理科の生徒に入営延期の措置がとられたため、文科の生徒のうち満20歳に達している者が徴集猶予停止の対象となった。川西氏は、こ

のときまだ18歳であったため徴集の対象ではなかった。この時点で大阪高等学校から陸海軍に入隊したのは10名であったという⁽²⁾。

しかしそれから間もない1943年12月24日に公布された「徴兵適齢臨時特例」（勅令第939号）により、徴兵適齢が満19歳に引き下げられた。この措置について、陸軍省による公式の説明では「これは決戦完勝の態勢を更に強化するため、軍に新鋭な威力を加へて、軍戦力の飛躍的向上を図り、また戦局の進展に即応するため、精鋭な兵員を余分に準備するといふのが軍事上の主な目的」とされていた。そして「今回の措置は、あくまでも臨時の特例」であり「これは法律の改正ではなく、一時的の変更で、変更の必要性が解消すれば、臨時特例は廃止され、兵役法の規定通りに行はれるわけです」と一時的な措置であることが強調されていた。しかし同時に「但し、今回の措置が短期間であるといふのではなく、また一旦低下した徴兵適齢が諸般の関係上、永久にそのままにした方が適當であるといふことになれば、兵役法の改正といふことが問題になるわけです」と、恒久化の可能性についても述べられていた⁽³⁾。1925年9月生まれの川西氏は、ちょうど高等学校を卒業する1944年9月に徴兵適齢を迎えることになったのであった。

そこで川西氏は、聞き取り記録にあるように海軍飛行科予備学生を志願し採用された。飛行科予備学生とは、1934年10月19日公布の海軍予備員候補者令と海軍航空予備学生規則によって設けられた制度で、当初は航空予備学生と称していた（1938年に改称）。海軍が航空兵力の拡充を進めるなか、高等教育機関の出身者を採用して約1年間教育のうえ予備少尉に任官させ、戦時に動員できる戦力として確保しようとしたものであった。

ただ、第1期の採用がわずか6名であった⁽⁴⁾ことに示されているように、海軍は当初この制度を重視していなかった。それが、アメリカ・イギリ

スと開戦し、南太平洋における消耗戦で熟練パイロットが多数戦死するようになると一気に採用数が増加し、1943年9月に入隊した第13期飛行科予備学生は合計5199名を数えるに至った⁽⁵⁾。さらにその次の第14期は1943年12月に入隊した一斉入隊組から約2690名が採用されている⁽⁶⁾。

川西氏が採用された第15期飛行科予備学生は、1944年3月17日の海軍省告示第6号で募集が公表されている。志願者の資格は、大学学部・大学予科・高等学校高等科・専門学校の卒業者（1944年10月1日までに卒業見込の者も含む）であり、9月に大阪高等学校卒業見込の川西氏は資格を満たしていたわけである。志願書類の締め切りは同年4月15日、採用のための身体検査・筆答試験・口頭試問は5月中に行うと告示にあるので、川西氏もこれに従って志願し、受験の上採用されたものと思われる。

第15期飛行科予備学生採用予定者は2回に分かれて土浦海軍航空隊に入隊している。前記の教育機関を1944年9月より前に卒業していた360名は9月8日に、川西氏を含むそれ以外の者約2000名は9月30日に入隊した⁽⁷⁾。

なお、入隊に先立ち川西氏は京都帝国大学法学部に入学手続をとっている。1944年10月の大学入学者選抜について、文部省は筆記試験は行わず出身学校長の調査書と従来の進学実績を参考に行う旨を同年5月10日に発表している⁽⁸⁾。聞き取り記録の中で川西氏が「試験がなかった、あのときは」と語っているのは、このことを指している。川西氏は10月に法学部に入学しているが、同時に休学届を出して入隊したわけである。

飛行科予備学生の教程は基礎・中間練習機・実用機の三段階に分けられ、海軍軍人としての基礎的な教育（艀教育・短艇・棒倒し・座学など）を行う基礎教程は通常3～4カ月で終了する。ところが、この第15期の基礎教程は1945年3月末まで約6カ月にわたって実施された。戦局が逼迫し

ており、少しでも早く彼らを第一線に配置することが求められていたはずなのに、なぜこのような措置がとられたかについては、「採用人員の急激な増加に対し、教官・教員となるべき搭乗員の不足や、飛行訓練に必要な機材と燃料の不足により、やむなく基礎教程期間を延長し、さらには本土決戦への陸戦要員への充当を、意図したものと思われる⁽⁹⁾」とする見解がある。戦争末期のこの時期になると、飛行機搭乗員養成のための教育訓練もできなくなっていたのである。

川西氏によると、基礎教程終了後は土浦を出てから「関東地方のどこか」へ移り、その後鹿屋（鹿児島県）に配属されたという。鹿屋に行く前に特攻兵器「桜花」の志願をしたということなので、いずれ出撃することが想定されていたものと思われる。

その後6月下旬に沖縄における日本軍の組織的抵抗が終結すると木更津（千葉県）に移り、さらに千葉県内を転々としている。海軍としては米軍の上陸に備える意図があったのであろうが、川西氏の言葉を借りれば「あの頃は海軍は無茶苦茶」であり、場当たりの対応に終始していたことがうかがわれる。

学徒出陣に関する聞き取り記録は数多いが、1943年12月の一斉入隊以後の入隊者のものはそれほど多くないと思われる。本稿は、戦争末期の海軍の混乱ぶりの一端がよく示されており、それに加えて入隊前の戦争認識や復員後の大学の状況なども興味深い点が多い。当時の状況を物語る貴重な証言であるといえよう。

[註]

- (1) 川西利衛「夜汽車の思い出」（「八月十五日の青春」編集委員会編『八月十五日の青春—大阪高等学校生（旧制）の手記』「八月十五日の青春」刊行会、

1996年) 229頁。

- (2) 大阪高等学校七十周年記念祭・事業委員会編『旧制大阪高等学校史』大阪高等学校同窓会、1991年、88頁。近年の調査に基づく他の高等学校からの入隊者数をみると、第三高等学校は69名(西山伸「第三高等学校における「学徒出陣」」『京都大学大学文書館研究紀要』第6号、2008年)、第五高等学校は48名(薄田千穂「第五高等学校の「学徒出陣」」熊本大学五高記念館編『熊本大学五高記念館叢書第1集 第五高等学校の学徒出陣』2012年)となっており、これらと比べると大阪高等学校の10名というのは在学者数が三高・五高の半数程度であったことを考慮しても、やや少ないように思われる。なお、この他に三高では9名、五高では2名の朝鮮・

台湾出身者の入隊があった。

- (3) 陸軍省「徴兵適齢の引下げ」(『週報』第376号、1944年1月5日) 14頁。
- (4) 小池猪一編著『海軍予備学生・生徒 第1巻』国書刊行会、1986年、54頁。
- (5) 第十三期誌編集委員会編『第十三期海軍飛行専修予備学生誌』1993年、40頁。
- (6) 註(4)に同じ、134頁。なお、このときから高等学校・専門学校在学者も採用されるようになり、これらの者は予備生徒といわれた。
- (7) 註(4)に同じ、168頁。
- (8) 『朝日新聞』1944年5月11日付朝刊。
- (9) 海軍飛行科予備学生・生徒史刊行会『海軍飛行科予備学生・生徒史』1988年、50頁。

[聞き取り記録]

1 大阪高等学校時代

西山 大阪高等学校に入られたのが昭和17年の4月と伺っております。ちょうど高校にご在学中に戦争がどんどん深刻な状況になっていったと思うんですけれども、高校生の時代、軍隊に入る前に、戦争のことをどんなふうに見止めておられたか、思い出すことがありましたら。

川西 私の家の環境が全然軍隊的じゃないんですよ。身内の中で軍人になったのは一人もおらん。大体、私らの時代には、中学生頃に陸軍士官学校とか海軍兵学校とかへ行くような連中がいろいろ話をしていましたけれども、私は全然相手にせなんだぐらいで、自分の家にもそういう軍人になった人はおらんし、全く当時の言葉でいえば非国民ですな。自分さえよければいいと。自分の家族のためとかいうのは分かるんだけど、国のためとか天皇陛下のためとは全然考えたことはない。自分のことしか考えない。自分の家族か、あるいは隣近所、顔見知りの人でないと、そのためにという気にならない。だから非常に非国民的な家庭に育ったんです。

中学だったか高校だったか、太平洋戦争が始まって、私らのような人間は悪く言われ出したんです。けしからんと。

西山 軍隊に行かないで遊んでいると。

川西 しかし私は、高校、大学へ行くコースでしたから、二十四、五までは徴兵延期がありますから、それまでには兵隊さんの必要もなくなって戦争も終わっておるだろうぐらいに考えておったところが、18年10月に学徒動員というのがありまして、文科と法学部と経済学部、農学部、それは兵隊に取りますと、徴兵延期しませんと。理学部や工学部や医学部はいいんです。私らは兵隊に行かんらんようになってきたんです。

西山 そうですね。

川西 ところが私、年がもうちょっと若かったんです。成年に達してなかったのだからまだいけると思っていたところが、追い打ちをかけるように徴兵年齢を一つ上げてきたんです。19歳ということ。

これはあかんと思っていたら、一つ逃げ道があったんです。単科の医大は文科の生徒でも取るという、そんなのがあったんですかな。私はあったつもりでおるんだけど、それがあから、私は文科でしたけれども、その逃げ道があるなと思って。

そこへ行ったやつもおるんです、私の友達で。金沢医大、岡山医大へ行ったやつがおります。私は、そういう逃げ道があるんだけど、理学的な頭が全然ないんです。例えば数学の時間に微分積分というのがありました。初めからしまいまで分からなかったですね。全然、数学的な頭がないものだから、医学部へ行ったってあかんと思って、絶望的な気持ちになっておったんです。

そうしたら、田辺明というのが同じクラスにおったんです。こいつが海軍飛行専修予備学生といったかね、そんなのがあるんだと。これは飛行専修だから飛行機のことを専ら教えるので、あまり兵隊的な締めつけはないぞと。予備がついているから後ろのほうにおればいいんだと。そんなことを言ってね。

それから、中村賢二郎⁽¹⁾というのがおったんです。同じクラス。これは京都大学の文学部へ行っている。これは今でも生きておりますから。戦後、毎日新聞へ入って、九州のほうで記者をしておりましたが、大学へ帰って京大の文学部の助手、助教授、教授になっていませんか。

この田辺明というのと中村賢二郎というのと私と三人で、海軍飛行専修予備学生の試験を受けに行ったんです。結局、田辺と私とが通って、いつだったか忘れましたが土浦へ来いと

いうあれが出た。

そのとき既に京都大学の法学部へ行っておったんです。試験がなかった、あのときは。中村が文学部、私と田辺は法学部でした。三人とも試験なしです。試験なしで合格です。

休学届を出して、私と田辺は土浦へ行ったんです。中村は、そのとき別れましたからどうしたか知りません。

土浦へ入ったのが昭和19年の。

西山 多分9月末だと思います。

川西 何か中途半端な、3月や4月じゃないんですよ。何か中途半端なときに入って、そしているんなことを習いました。

西山 もう少し土浦へ行く前の話、よろしいですか。

こちらの文章⁽²⁾に、お母様が非常に戦争に対して批判的だったということを書いていらっしゃるけれども、ご家庭全体がそういう感じだったのでしょか。

川西 みんなそうでした。

西山 お父様もお母様も。

川西 父親もそうです。

西山 お父様はどういうお仕事を当時されていたんですか。

川西 砂糖会社へ勤めていました。砂糖会社というのは、塩水港精糖株式会社。塩水港というのは、台湾にそういう地名があるらしいんですよ。その砂糖を持ってきて製造するような。藤山愛一郎⁽³⁾というのがおったでしょう、大日本製糖。あれの子会社らしいんですよ。

別に思想的にどうのこうので引っ張られたことはないんですけれども、いつも戦争反対でしたね。

西山 そうですか。では、ご家庭の中がそういう雰囲気だったということですね。

川西 家庭の中だけでなしに、私のおったところは大阪市の四貫島というところですけども、柄の悪いところでね。戦争反対のやつのほうが

多いんですよ。本気になって反対しているんじゃないに陰で反対するんですよ。

大阪に鶴橋というところがあります。東の鶴橋、西の四貫島といって、とにかく戦争に反対だけれども、反対の仕方が人のおらんところで反対する。うちもそれでした。

私のおったところでも激しかったです。天皇陛下の悪口を一生懸命言いよったですね。

西山 誰がですか。

川西 近所の者も。あの辺の雰囲気として。

西山 なるほど。

川西 そういう悪い雰囲気に育っているから、兵隊を逃げよう逃げようとしていた。

この連中も同じことです。これも逃げよう逃げようとしておったけれども逃げられんようになった。学校は途中で取られるようになるし、年齢も徴兵年齢が19歳まで下げられると、逃げられんのですよ。

私の場合には医科大学へ逃げようと思っても脳がないから、これも逃げられん。全部塞がれた。

そこへ田辺というのが海軍の飛行機乗りがあると。

西山 言ってきたわけですね。

そうしますと、戦争に対して批判的だったということですが。

川西 そんなに理屈で反対じゃないので、気分で反対なんです。

西山 ただ、戦局の動向がだんだん不利になっていきますが、それは当時も理解されていましたか。

川西 それは分かっていました。私の近くに中富という弁護士がおりまして、その弁護士が中央大学を出た弁護士でしたけれども、大阪の市会議員か府会議員かに立候補するんだけど、いつも落ちるんですよ。大政翼賛会に入っておらんから落ちるんですね。

その家へよく遊びに行っておったんです。その息子と私が中学の同窓生だったから、そ

の家へよく遊びに行っておったんですが、その先生が戦争反対なんですよ。これは思想的に反対なんです。

太平洋戦争が起こったのは私が中学生のときだったと思うんです。中学か高校かな。そのときに、たまたまそこへ行っておったら、その弁護士先生が「ああ、これでもう日本は終わりや」と言っていました。私は尊敬しておった先生だから、それが頭にこびりついているんです。

そういう状態だったから、思想というのはないけれども戦争に反対でした。

ところがやっぱり年が若いせいかな、時々軍人のええ格好したのが映画なんかに出てくると、これはええなと思ったりして、矛盾しているんですけれども。そういう時代でした。

西山 川西さんが軍隊に入られる前の昭和18年12月に、同級生の方が何人か軍隊に行かれたかと思うんですけれども、そのときのことを覚えていらっしゃいますか。

川西 よく覚えていますよ。私はボート部にいましたけれども、ボート部の先輩でそのとき京大の法学部にいた小西秋雄⁽⁴⁾というのがおまして、これが18年12月に行きました。私より年がちょっと上だったから、もう逃げられんものですから。

この人が戦後、京大の法学部へ帰ってはきましたけれども、戦時中にシベリアで捕虜になって帰りが遅れて、私と一緒にしたんです。先輩だったけれども。

西山 学年が。

川西 同じになった。

西山 あと、高校生のときの同じクラスに竹山康之⁽⁵⁾さんという方がいらっしゃいませでしたか。

川西 おった気がしますね。私より年が大きかったような気がする。

西山 昭和18年に軍隊へ行かれているんですよ。

川西 陸軍だ。どこか兵隊さんで行って、幹部候補生を受けてないはずですよ。何か兵隊さんで行って、途中で船が沈んだか何かで死んでいるはずですよ。

西山 戦死されています。

川西 あれか。今、思い出した。

西山 京大には籍だけ入学して。ただ、京大には結局通わずに戦死されている。

川西 思い出しました。

西山 あともう一人、この方は軍隊には行ってないんですけども、恐らく高校の同級生だと思えますが、清水幸義⁽⁶⁾さんという方を覚えていらっしゃいませんか。結局、この人は徴兵検査で不合格で、軍隊に行っていないんですよ。

川西 足が悪かった。思い出した。

西山 戦後、小説を書かれていて、本業は高校の先生らしいんですけども。学徒出陣についての小説を書いておられて。

川西 思い出しました。ありがとうございます。

2 海軍時代

西山 そうしましたら次に、土浦に行かれてからのお話を聞かせていただけますか。

だいぶ長いこと、いわゆる基礎教程をされていたと思うんですけども、どんな訓練を土浦ではされておりましたか。

川西 土浦では、まずハンモックの使い方、初めてでしたけれども。ハンモックの使い方や、カッターボートもありました。それからモールス信号、ト・ツー、ト・ツーをやりました。それから棒倒しをやりました。それから分隊対抗の1万メートル競争をやりました。それからグライダーも少しやりました。そんなもんでしたかな。

西山 どなたが教えたのでしょうか。

川西 教官は、千代谷というのが分隊長でした。名前は忘れまして。これは中尉でしたけれども、途中から大尉になりました。

それから、鷺見というのが分隊長におりました。分隊長と言っておりましたけれども、分隊長付士官というんでしょうか、分隊長の下で仕事をしておりました。この鷺見という人が京大の文学部だったと思うんですよ。

西山 では彼も予備学生だったわけですね。先輩の。

川西 恐らくそうでしょう。軍隊の学校を出ているんじゃないんです。

それから、安田というのがおりました。これは少尉でしたけれども、これは何か仏教関係の大学を出て、私よりも1期か2期か上の予備学生でした。

西山 要するに、教えたのは少し上の大学とか専門学校出身の予備学生の方が教官になっていたということですね。

川西 千代谷というのは海兵出でした。

西山 ああなるほど。よく聞くのは、海軍での教育のときの私的制裁。

川西 これは激しかったですよ。来なきゃよかったと思いました。私らが兵隊を嫌っていたのは、初年兵になったら殴られてえらい目に遭うから嫌っていたんです。海軍なら大したことはないだろうと、飛行専修というから飛行機だけ教えてくれだろうぐらいに思っていたら、物すごく殴られるんですよ。敬礼の仕方が悪いとか、作業服の左右のひもが平等になっておらんとか、理屈じゃなく殴るんですよ。皆言っていましたけれども、郵便ポストが赤いのも、電信柱が高いのも、みんな私が悪いんですよ。

西山 殴るのは、先ほどの先輩の予備学生が殴るんですね。

川西 そうです。それから、いろんな教官がおります。モルス信号の先生とかいろいろあって、皆殴るんですよ。どうやら海軍の精神が、軍人精神を入れるのは殴るのが一番ええということになっておっただけなんです。殴るほうが手が痛くなって、バケツの水で冷やしてから殴っ

たりしていたから、殴らないかんようになっておったんでしょうな。

入った者こそ迷惑です。

西山 例えば、そのときには連帯責任みたいな感じで、自分じゃないのに同じ分隊の人間が何かミスをしたからといって、みんなが殴られるとか。

川西 ありました。再々ありました。

隊におる間に何遍殴られるか勘定しながら日記をつけておったような者がおりましたけれども、分からんようになったと言っておりました。あんなに殴られるのなら行くんじゃないかと思いました。

西山 そうですか。

記録を見ていると、土浦で基礎的な訓練を受けておられる間に、飛行の適性検査を受けたようなんですけれども、覚えていらっしゃるんですか。

川西 どんな検査ですか。

西山 飛行の適性検査はいろいろありまして、例えば体のバランスを見たりとか、ぐるぐる回る器具に固定されてそのあとすぐに立てるかとか。

川西 ありました、ありました。やりましたけれども、検査でなしに授業のようなつもりで私は受けていて、気がつかないんですけども。

西山 飛行科予備学生でも操縦と偵察と要務とに分かれると思うんですけども、その中で操縦になられたわけですね。

川西 いや、操縦でなしに、何に入っておったのかな。要務の部類に入るのかもしれないね。土浦を出てからどこへ行ったかという記憶がないんですよ。

思い出してじっと考えたんですけども、土浦を出てから、土浦を昭和20年の3月か4月か、桜の咲く前だったような気がするんですけども。終わって、それから、みんないくつかに分かれた。三つも四つも五つにも分かれて、ばらばらで出ていった記憶はあるんです。その行っ

た先が、どこへ行ったか記憶はないんだけども。そのときに話をしておいて、歌の下手な人を我々は音痴じゃ音痴じゃと言っておりましたけれども、そう言わずに、あいつは犬吠埼だと。

西山 千葉の犬吠埼。

川西 何で犬吠埼だと聞いたら、犬吠埼はどこにあるのか、銚子の外れにあるじゃろうと。そんなことを言って、私ら西日本で育った者には初耳でしたから、そんな話をしたのが記憶にあるんです。だから、関東地方のどこかにおったんだと思うんですよ。土浦を出てから。

ごっちゃになるのが、私は鹿屋から、鹿屋で沖縄がやられてしまったから元へ戻れということで帰って、また東日本へ行っているんです。そのときに館山とか茂原とかいろんなところへ行っている。それと一緒にいるんですよ。

だからちょっと思い出せないんですけれども、そっちで何か資料はありますか。

西山 土浦が終わってから、鹿屋から戻ってこれられるというのは、多分6月の終わりぐらいじゃないかと思うんですけれども、その3カ月間、つまり土浦から鹿屋に行かれるまでの間、場所はともかくとして、どんな訓練をされたのでしょうか。

川西 やたらにグライダー訓練をやらされました。グライダー訓練とか、それから教えることがなくなっただけモルス信号をやらされたり。

空襲がそろそろあり出したような気がするんですよ。警戒警報が出ておいたら飛行作業なんかないんです。室内で何かをせないかんといって、室内でモルス信号をやったり、訓話みたいなものを聞かされたりして、まとまった教育は受けておらんのです。

西山 土浦にも空襲があって、何人か同期生が亡くなっている⁽⁷⁾んです。それは覚えておられないですか。

川西 空襲はいつ頃あったんですか。

西山 空襲があったのは6月ですね。昭和20年6月10日。

川西 20年の6月だったら土浦にはおりません。

西山 鹿屋にいらっしゃった頃ですか。

川西 鹿屋でしような、恐らく。6月になってから鹿屋を引き上げて、また関東地方へ来たような気がします。

西山 記録を見ますと、土浦から皆さん、いろんなところに分かれるんですよ。同じ関東地方なんですけれども、例えば石岡とか、あるいは神立、そちらのほうでグライダーの訓練をされたという方がいらっしゃるんですけれども、そんな感じですかね。

川西 そうかもしれません。グライダーに乗っているときに聞いた話で、ここは上昇気流がよけあってグライダーには適しておるんだというようなことを言ったから、筑波山辺りじゃないだろうか。そんな気もするんです。

西山 分かりました。そうすると先ほど操縦と偵察と要務と申しましたけれども、要務は飛行機に乗りませんので、グライダーに乗っておられるということは操縦ですね、恐らく。

川西 そうですか。操縦が幾つにも分かれていたのか。

西山 どうもそのようです。

川西 操縦といたらおかしいね。どこへ行っても、操縦させてくれんのですよ。

西山 飛行機と燃料もなくなっていたみたいで。

川西 でしょうね。燃料はないと言っていました。ア号燃料とか。ア号燃料は飛行機に乗っていてもプロペラが止まるんだというような話を聞いていました。

西山 アルコール混ぜのガソリンですね。

川西 そうらしい。海兵を出たやつにはまともな燃料が入って、我々予備学生のはア号燃料だというようなことを言っていました。

結局、鹿児島県に派遣されたときに、みんな

で言っていましたけれども、飛行機は操縦できなくても特攻隊なんじゃとって、何かでぶら下げて行って、ぼんと放るんじゃと。

桜花⁶⁾というのは隊の名前だったのか飛行機の名前だったか忘れましたが、桜花というのがあって、ドイツが発明したV-2号というんですか、何かそれが日本にも技術が伝えられて、ドイツではそれを無人操縦で、電波操縦で後ろのほうから人を乗せずに送ることができるけれども、日本へ来たときには人を乗せるようになって無線操縦の技術がないから、人を乗せてその飛行機が飛んでいくのであって、その飛行機に乗せるのを予備学生にせいということになったというような話をしていました。

西山 その特攻隊に、おまえらは特攻なんだという指示が、上官からあったのですか。

川西 それは覚えておるんです。それだけは不思議に覚えておるんですけれども、どこでそれがあったのか、場所はまだ分からんようになっておるんですけれども、何かしら広っぱへみんな集まれと言って集まって、その前に高い台があって、そこへ司令とか副長とか二人が上がって、おまえらの教育はもう終わりが来たから、これからは任地へいろいろ行ってもらうようになる。ついては、特攻隊を志望する者は一歩前へと。私は出とうなかつたんやけれども、四方八方、皆出るんですよ、一歩。私はじっとできん。私も仕方なしに一歩出て、そうしたら司令と副長、二人おったんだけれども、副長のほうが「総員特攻志望」というようなことを言った。そうしたら司令が「ありがとう」と言って、それで決まったんですよ。

何かしらだまされたような気持ち。みんな志望したという形を取ったらしい。

西山 そのときのお気持ちはどういうものだったのでしょうか。あるいは、ほかの同期の方たちと何かお話をしたりとか、そういうことはなかつ

たですか。

川西 そのときは既に諦め切ったような気分でしたから、どうにでもなれという気持ちで、あまりがっかりもしませんでした。土浦でしごかれたときから、だんだんだんだん環境に順応するようになっていて、死ぬ道を歩かざるを得んだというような気持ちでしたね。

西山 ちょっと話は違いますが、土浦からいろんなところに訓練に行っている間に、ご家族との間の連絡はあったんですか。

川西 いや、ありません。昭和20年3月でしたか、私は大阪なんですけれども、大阪の家が全部焼けた。私の家が全部焼けて、岡山の西大寺へ引越しておるから、休暇がもしあったらここへ来いと住所を書いて送ってくれた。

土浦を出てから、関東地方のどこかの航空隊において、そこで特攻隊に編入されたんです。途中、自分の家へ寄ってもいいぞと言われたんでしょうか、岡山の西大寺に行った記憶はあるんですよ、そのときに。3月に空襲で焼けておったから、もし休暇があったらここへ来いという手紙を親父からもらっておりましたから、岡山へ向かって行ったんだけれども、途中、自分の生まれ育った大阪のほうが懐かしいから降りたんです。途中下車した。自分の生まれた四貫島というところへ行つたんです。一面の焼け野原で、何かそのときに私はこれで終わりじゃ、日本は終わりじゃという気持ちが湧きました。

西山 そうすると、ご家族との間にお手紙のやり取りみたいなものは、訓練中はあまりなかったわけですか。

川西 特に頻繁には来ていませんな。時には来ているんでしょうけれども、記憶がないですな。

西山 基地でも面会はなかったですか。

川西 一回ありました。親父と会ったことがあります。土浦へ来ました、親父が。そのときに会うとるだけです。そのときには、まだ大阪は焼

けてなかった頃です。

西山 岡山でご家族とお会いになって、そのときに特攻隊に編制されたというお話はされたんですか。

川西 これは言わざるを得んのですよ。それを言うために休暇が出たんですから。当時の習慣としては、特攻隊で死ぬ場合には遺骨が残らんわけです。ばらばらになってしまう。ですから休暇のときに、髪の毛と爪を切って半紙に包んで持って帰ったんですね。もし戦死したという公報が入ったら、これを墓に埋めてくれと。みんなそれをやっているんです。

当時はみんな丸坊主ですから、髪の毛を伸ばしておらんから、昨日散髪したところだと言った人がおりましたけれども、すねの毛を切ったり、けしからんところの毛を切ったりして半紙に包んでおりました。

私は散髪屋へ行って、髪の毛をもらって、爪を切って、それを西大寺の自分の家へ持って行って、家にあまり言えんから親父にだけ小さい声で、「もし戦死の公報が入ったらこれを墓に埋めてくれ、遺骨は残らんから」と言ったんですよ。

面白いことに、私が戦争が終わって命も助かって帰ったら、私の髪の毛と爪が半紙に包んだままで仏壇に置いてありました。陰膳というんですか、飯を盛って、線香臭くなるくらい飯をやっておるんですけれども、自分の写真と髪の毛があるんです。線香臭くなった飯があって、無事に帰ってきたから親父がうれしかったのか、冗談を言ってその飯を下ろしながら、「ご先祖の皆さん、利衛はそっちへ行くのをやめました」と言って、母親が横で聞いていて、けらけらと大笑いで笑っていましたから、俺は親孝行しているなと感じました。

西山 それで岡山から鹿屋に行かれたわけですね。鹿屋では、結局待機しているような感じなのでしょうか。

川西 結局そうですね。私らに出動命令は来んまに6月になって、日にちは忘れましたが、何か作戦の名前を言っていました。私らはそんな作戦の内容は知らなくても、言われるとおりにおればいいんだから、どんな作戦かというのは全然知りませんが、そういう作戦が全部なしになったんです。要するに沖縄が米軍に占領されてしまったので、我々は要らんようになった。

それで、おまえらは木更津へ行けということになった。木更津にあった司令部付か何か、そんなポストがあったのかどうか知りませんが、木更津へ行ってもあっちやこっちやと行った記憶はあるんですね。木更津から館山へ行った記憶、それから茂原へ行った記憶はある。それから成東というところがありました。

何か沖縄を取った米軍が今度攻めてくるのは鹿児島へ上陸するか、それとも九十九里浜へ上陸するかと。その両構えの作戦を取っていたらしいんですよ。だから私が木更津へ行ったのは、九十九里浜へ上陸してきたときにそれに突っ込むという、そういうことらしいんですね。

西山 迎え撃つということですか。

川西 あっちこっちをうろろろしていた。そのせいで九十九里浜の沿岸地方をうろろろしていた。

西山 そのときは、あちこち移られている中で、具体的にはどんなことをされていたんですか。

川西 あの頃は海軍は無茶苦茶です。秩序も何もなかった。空襲警報がしょっちゅう出ていました。だから何もできないんですよ。

私がちょっと記憶しているのは編隊の組み方を習ったことがあるんですよ。自転車です。

西山 飛行機に見立ててということですね。

川西 そんなことをして何が分かるのか。向こうのほうで説明しているのが聞こえたり聞こえなかったりする。こっちもあまり聞く気もないから、自転車を降りて聞いているような顔をしておっ

たけれども何も聞いておらんのです。そんなことがあったり、それからモールズ信号、ト・ツー、ト・ツーをやたらに教えてくれました。することがないからでしょうな。

そのときに、私がぼんやりと飛行場におったときに、アメリカの艦載機でロッキードP-51、あれに機銃掃射を受けたことがあるんです。建物のあるところへ早く入らないかんのだけでも、私は怖いからそのまま伏せてしまった。その横を機銃掃射の跡がパーッと煙になってそばを通過して、しばらくするとこれが落ちてきた。葉莢です。これは記念に持って帰ったんですけども。

空襲警報も何も出ておらんのですよ。突然やってきて。制空権を全部取られてしまっているんです。アメリカの思うままになっていた。だから迂闊に飛行機なんか乗れんわけですよ。

私らはろくに教育を受けてないですよ。今言った爆弾の中に操縦席があるようなものを我々に与えて、カタパルトみたいなものでパンと出すんだと思うんです。出したら、しばらくは空中を旋回できるらしい。敵を見つけたらジェット噴射か何かがあるんですよ。それを入れたらジェット噴射で出るのでぶち当たってくれと。だから訓練せんでもいいわけですね。何かそんなことらしいんですよ。

結局、木更津へはおったりおらんだけで、何かあっちやこっちや回っていたという記憶があるだけで、こっちも本気になって何もしておらんのですよ。暇があれば逃げていましたから。

西山 その頃、戦争はこれからどうなっていくとかいうことを考えたりされましたか。

川西 考えていました。もう終わるといことだけは考えていました。

終わってどうなるかということまでは考えません。もうやけくそです。

だからもう、あまり逃げようという気はなかつ

たですね。言われるままに突っ込めと言えれば突っ込むし、この山へ逃げろと言ったら逃げるし、言われるとおりにしておきますと。やがては日本が滅びるでしょうと。そういうやけくその考えでした。そんな人が多かったはずですよ。私の周囲にもそんなのばかりでした。たまには、まだこれから盛り返すんだと言って頑張っているやつもありましたけれども、私らはもうあかん組です。

西山 そういう中で、8月15日の放送を聞かれるわけですか。どういう状況で聞かれたんですか。

川西 終戦の詔勅を聞いたのは木更津です。8月15日の正午に天皇陛下の言葉があるから帰ってこいということで、我々は帰ったんです。みんなしてラジオを聞いたのは覚えています、ラジオがガーガーいってよく聞こえん上に、天皇陛下の言うことが難しいんです。日本語にはあるんでしょうけれども、我々が聞いても分からんようなことを。どう言うたかな。「朕ハ茲ニ」とか何か難しい、分からない。聞いているうちにだんだん分かってきましたけれども。

西山 分かってきましたか。

川西 分かってきました。これは負けて降参しようというんだなということは分かりましたけれども、分からん人はようけおりましたよ。その放送が終わってから、天皇陛下は何を言うたんやと。もっと戦争せいと言ったんじゃないかと。耐え難きを耐え、忍び難きを忍んで戦いを続けよと言ったんだと。だいぶおりましたよ、そんなのが。程度が悪かったですね。

西山 上官から何かそのときに指示はあったんですか。

川西 その頃私は少尉になっていましたから、位は上になっているから、上官はおったけれども、昔のように縛られてはいなかった。

西山 では逆に、部下に何か言わなきゃいけないような。

川西 部下という部下はおらんけれども、何人かおりましたけれども、そいつが言いよったんです。もう負けたんじゃないかと。

原子爆弾が落ちました、その前に。8月6日に広島に落ちて、9日に長崎に落ちました。戦争をやめたのが8月15日ですから、それ以前に落ちたんですけれども、原子爆弾が落ちたのを、その連中は、向こうも物資がなくなったんだからもう一息だ、頑張ろうと言っておまして、何のことを言っているのかと思ったら、原子爆弾というのは原始的な爆弾で石を落とし出したんだと。向こうも物資不足で困っているんだから、もう一頑張りしましょうと。そんなことを言っておるやつがおりました。

西山 それは同じ海軍の人ですか。

川西 海軍ですよ。そんな連中ばかりだから、天皇陛下があんまり難しいことを言うから意味が通じておらん。

西山 では、除隊というか解散するのはうまくできたんですか。それはスムーズに。

川西 天皇陛下はもう戦争をやめろと言ったんだけれども、やめるのは嫌だというのがおりました。神奈川県の厚木の航空隊が反乱を起こした⁽⁹⁾。司令が戦争終結反対なんですよ。小園といたかな、頑固な男らしいんです。それが戦争終結反対だと言って、厚木の航空隊が全体として反乱を起こした。これを鎮めるために、高松宮というのがおりました。天皇の弟、中佐でした。この人を中心とする説得団みたいなものが編成されて厚木へ行ったんだという話は聞きました。木更津で聞いているんですから不確かですけども。見たことないんですけども。

西山 木更津では、厚木のようなことはなかったですか。

川西 反乱はなかったですね。

木更津には航空隊がようけ籍を置いていたから、搭乗員だけ集まれという命令が来たんです。

搭乗員だけ集まったんです。そこへ副長がやってきました。中佐だったと思うんですけども名前は忘れまして。これが説得にかかったんです。何で搭乗員だけ集めたかという、整備の者やら主計の者やら、ほかの者が反乱を起こしても、搭乗員さえ大丈夫だったらいいという。こいつを早く散らしてしまおうという、そういう意図だったらいいんです。我々を説得にかかったんです。

私らは説得にすぐ応じるほうですけども、二、三、反対するやつがおりました。しかし、あまり強い反対はなかったです。

というのは、ようけもらったんですよ、物資を。飯盒いっぱいの白米だったり、皆食い物ですよ。とらやの羊羹だったり、酒もありました。一級酒でしたよ。それから航空糧食というのがありました。うまいんですよ。ビスケットみたいなもので、チョコレートも入っているし。ああいうのをくれた。

西山 それでみんな、おとなしく。

川西 それで、おとなしくするために。

海軍の方針は、ここで一籌を輸することに決まったというんです。一籌を輸するというのは、負けた格好をするという難しい中国の言葉ですよ。負けたふりをして、みんな一遍家へ引き上げてくれと。折を見て召集するから、そのときに集まってくれと。

私はすぐ応じましたけれども、ぶつぶつ言っておるやつもおりましたね。出だした小便が途中で止まるかと言って、いつもは副長にそんな言葉は使えんのだけども、言っておるやつもおりました。

何のかんの言うても食べ物をようけもらったのがよかった。皆、言うことを聞いて木更津から散りました。

3 復員後

川西 内房線に乗って東京へ行って、東京で東西南北、皆それぞれ家へ行ったんですけれども、まだ終戦から1週間もたたん頃。早かったですよ。まだアメリカの占領軍が来てないんですよ。私らは軍刀や階級章をつけたままで、武装解除されておらんのですよ。だから恐らく復員の第1号ぐらいじゃないですか。間が悪いと思っていましたが、一番間がよかったです。

私は、家は大阪でなしに岡山になっているから岡山を目指して帰っていったんですけれども、そのときの汽車のタイヤが無茶苦茶に乱れてしまって、なかなか時間がかかりました、帰るまでに。とにかく西へ向かうものを乗り換え乗り換えしていった記憶があります。

そのときに武装解除しておらんから軍刀を持っていました。ほかのお客もそんなに軽蔑したような顔じゃなかった。もうちょっとたったら復員兵とばかにされていた。

西山 それで岡山に戻られて。

川西 西大寺というところへ帰ったんです。そこで家へ帰って、大阪にあったものは全部焼けていましたから、妾さんの家だったとかいう小さい家を借りたのか買ったのか、多少銭があったんでしょう。それを買って、小さい家を西大寺に建てて、親戚の子供を2人養っていました。貧乏の真っ最中におった。親父が人生最悪の時代でしょう。

西山 じゃ、ご両親と。

川西 それから親戚の子供2人と。

西山 ご兄弟はいらっしゃったんですか。

川西 ない、僕は一人です。これに死なれたら困ると思ったんでしょう。貧乏のどん底で、知らんところへ来ているから、つてがないものだから、なかなか食料も手に入りにくいし、どん底のルンペンみたいな生活をしているところに帰ったんですよ。そのときに私が木更津でもらった

ような食べ物は喜ばれました。福の神が来たような感じ。

そのときですよ。親父が仏壇の中にある私の爪や髪を下ろして、陰膳に据えた飯も下ろして、「利衛はそこへ行かんことになったからな」と力強く言って、母親も大笑いに笑ったのはそのときです。

その数カ月前に私は休暇で帰っていますから、あのとき母親も私と別れるのがつらかったらしい。

おかしかったのは、大阪におった頃、支那事変が起こって、町内から支那事変に参加した兵隊が戦死して帰ったりする。その頃は大阪の連隊の偉い人が白木の箱に骨を入れて持ってきてくれるんですよ。それを家の人が受け取るんだけれども、町内会とか婦人会とかが立ち会うんです。太平洋戦争が始まってからは、そんなことはせんようになりましたけれども、支那事変のときはそれをやった。

そのときに遺骨を受け取る奥さんが、私はそのときには泣き崩れてどうしようもなくなる、どうしたらええじゃろうかということをおの母親に聞きに来ておりました。母親が婦人会の何かをやっておったんでしょうか。母親が「何を構うものか、泣き崩れて大きな声でぎゃーぎゃー泣けばよろしい」と、女侠客みたいな言いたいことを言っていたんです。

ところが私が特攻隊に編入されて、休暇で帰って、もうこれでお別れじゃと家を出ていくときには、「利衛、私は見送りせんからな」と言って。みんな軽便の西大寺鉄道⁽¹⁰⁾まで送ってくれたんですけれども、母親は「私は見送らん。玄関でさようなら」と言った。恐らく乱れると思ったから、前もって行かんことにしたんだと思うんです。

私は親不孝しているなど、そのときに思いましたけれども、そんな母親でした。とうに死に

ましたけれども。

西山 あともう少し、大学でのお話も伺いたいんですけれども。

川西 大学の話は、もちろん戦後ですね。戦後は、私は貧乏のどん底ですから、あまり家に負担をかけられないから、はじめは友達の家へ転がり込んで大阪から通ったんです。大学には、学生課というのがあったと思うんです。今でもあるかな。下宿を頼んでおったんです。

西山 あっせんを。

川西 そこに私の経歴を書いて、こういう人間ですと登録しておったんです。

下宿がありましたから来てくださいと言われて行ったんです。何とそれが下宿じゃないんですよ。先斗町というところがあるでしょう。先斗町の芸者置屋の用心棒です。その代わり下宿代はただ。私はそのとき貧乏のどん底ですからそれに飛びついた。飯は食わせてくれのだけでも部屋代がただやったら申し分ない。あの頃、京都は、周辺の大阪なんか焼け出されているからようけ流れ込んでくるやつがおって、下宿なんかないんですよ。進駐軍がやってきて、いい家はみんな進駐軍に取られているんです。だから京都は住宅難もいいところだったらいい。だから我慢せなしようがないと思って先斗町に住みました。

西山 置屋の用心棒を大学があっせんしたということですか。

川西 大学が世話したんですよ。そのとき言いました。「どうかと思うんですけれども、あなたは兵隊帰りだからどうですか」というようなことを言った。大学から芸者置屋を紹介されたというのは、あの時代、無茶な時代でした。

西山 大学に通い始めたのは、いつからですか。

川西 昭和21年の春、復学したかな。休学届を出しておりましたから、同僚はすぐ昭和20年9月か10月には皆復学していましたけれども、私は

ちょっと遅れました。さっき言っていた小西秋雄はそれよりもっと後でした。小西秋雄は「6回生だ、俺が一番古いんだ」と言っていました。シベリア組です。

学校へ行くのでも学生服を着ているのもおるし、ナツパ服を着ているのもおるし、軍服の払下げのいかにも戦争でもやりそうな格好をしている者もおるし、ばらばらです。

その頃、大河内傳次郎という俳優の「わが青春に悔なし」という映画⁽¹¹⁾があった。

西山 黒澤明監督の映画ですね。

川西 黒澤明監督で、滝川幸辰をモデルにした。あれの撮影を京都大学の1番教室でやりました。法経1番教室で。そのときに生徒は学生服もおるし、ナツパ服もおるし、軍服もおるし、ばらばらなんです。助監督みたいなのがやってきて「学生服以外の人は出てください」と。戦前の場面を撮ると思うと。

西山 軍服はおかしいですからね。

川西 「いや、おまえらおったほうがええんや」と監督が。ナツパ服とか兵隊服、そのままおってくれというから、私はそのままおった。戦後、滝川幸辰が復帰して帰って、第1回の講義をする場面だったらいいんです。

西山 いてもいいわけですね。

川西 おったほうがええと。ばらばらなのがええと。戦前のように学生服一色ではないと。

助監督にまた、「すみません、おってください」と言われたことがあります。

西山 では実際の学生さんがエキストラみたいになったわけですね。

川西 そうそう、エキストラ。金はもらえんので、ただですよ。大きな教室ですから、ようけ人間はおるんです。はじめは「兵隊服やナツパ服の人は出てください」と言ったから、ぞろぞろ出かけた。途中から監督が入ってきて、「おったほうがええんや」と言った記憶があります。

西山 何か当時の授業とか、あるいは先生方で、ご記憶に残っていることはありますか。

川西 私は勉強をあまりしなかったから、勉強したのやせんのやら訳が分からんですね。

ただ、単位制というか、何か単位を取りさえすればいいので、何科目か取ればいい。必要な科目だけは取ったんですけども、深く勉強はちょっともしておりません。

あの頃はそんな状態ですから、私のようなのがようけおったんじゃないですか。

西山 生活するのにだいぶ大変だったんじゃないかと思うんですけども。

川西 生活は、先斗町の用心棒でしたから、部屋代はただです。

西山 でも食事代は。

川西 食事代は要ります。親から仕送りを受けましたけれども。

当時は太秦というところに映画会社があった。あれがよくエキストラを募集して、それに応募してだいぶ行きました。トラックに乗せてくれるんですよ。京大へやってくるトラックが。40人も50人も行きましたよ。「素浪人罷通る」という映画⁽¹²⁾でした。初代の水谷八重子のご主人の何やらというのが主演でした。それが同心で、その下の子分の捕り方に京大生を使うんです。私は行きまして、太秦へトラックで運ばれて行って、同心が「進め」とか言ったら、「おー」と走ったら、それでしまいです。そんなので錢を稼いでいました。

それよりも、先斗町の芸者置屋の用心棒がよかったです。

西山 でも、危ないこととかなかったんですか。

川西 一人前になる前の舞妓が三、四人そこにおいて、三味線やら歌やら仕込まれていた。女ばかりの所帯ですから、あの当時は強盗が女世帯ばかりを狙ってやっけてきている。私の入ったところは、タカノヤ⁽¹³⁾と書いていましたけれども、

大きな暴力団組織みたいなものがあった、それが警察代わりです。先斗町全体がそれに入っているんです。何かもめごとが起こると、そこへ電話したら若頭みたいな物事の分かった40代ぐらいの人が三、四人、鉄砲玉と書いていましたけれども、連れてやっけてきて、問題を起こしたやつを相手に決着をつけてくれる。組合として、その暴力団と契約を結んでいました。

個人としては、夜寝ているときが怖いんです。女所帯ばかり狙っているから、男が出入りしているところだということが分かれば泥棒も来ないだろうということで、私はそこで寝起きしておりました。中二階みたいな感じで、物置ですよ。そこに寝ておって、下で強盗が来たら綱を引っ張る、そうしたら中二階の鈴が鳴る。そのときは下りてくださいと。みじめなものですよ。

昼間になったら学校へ行くんですけども、夜になったら用心棒ですよ。

西山 それは大学の卒業までずっとですか。

川西 そうです。いろいろ色街のこともよく分かりましたよ。

例えばあの頃、人身売買というのが平気で行われていました。娘を売った父親と置屋の女将が話しているのを聞いたら、どうやら金で娘を買ったらしいというのが分かりました。お父さんは「よろしく願います」というようなことを書いていましたけれども。

あの頃は、ああいう暴力団組織もありましたから、大分勉強させてもらいました。京大では勉強しておらんけれども、下宿では勉強させてもらいました。

西山 それで就職ということになるわけですがけれども、就職活動みたいなものは。

川西 就職活動は全然しない。卒業したら家へ帰った。家へ帰って、しばらく遊びました。それから地元の合同新聞というのがあって、それが募集しておったから応募したら通ったんです。そ

の合同新聞が今の山陽新聞の前身です。それからは一応、まともな人間になりました。

西山 そうしましたら、だいぶ長くなりましたので最後にお聞きしたいんですけども、ご自身の戦争体験を今振り返って、何か思われることはありますか。

川西 あの頃は、お国のためとか天皇陛下のためというようなことをみんな言っていましたけれども、私はそんな気は一つもなかったです。

特攻隊に編入されて、特攻隊になったときは情緒不安定というか、今まで笑っておったのに急に怒るとか、情緒不安定というか、あんな状態ではあったんです。

例えば、千葉県に成東というところがあるんです。そこに陸軍部隊の通信隊がおりました。その通信隊へ何かで出かけていっておったことがあるんです。そこでアメリカが日本国民に向けたラジオ放送があったんです。グアム島だとかどこかで放送局をつくって、日本向けの謀略放送をやっておった。それを聞かんかというから、聞かせてくださいと。毎日1時とか2時とか定時にその放送があるので、聞かせてくれと言って聞いたんです。その放送の前に、日本の昔の音楽をやるんです。「月の砂漠」ともう一つ「波浮の港」、これがかかっていたんです。私は子供のときに家に蓄音機があって、ラップのついている。あれで何遍も聞いたことがあるんです。それを聞いていたら何か悲しくなってきた、涙が出そうになってきた。これは人に見られたら格好悪いと、立ち上がって便所へ行ったことがある。便所で泣き終わって、拭いて出てきて、陸軍の将校が「海軍さん、どうしましたか」「いや別に」とごまかしたけれども、情緒不安定です。

私だけかと思ったら、ほかの者もおかしかったですね。私らのおった部屋は大部屋で、壁際に二段ベッドがありました。そこで皆暮らして

おったんですけども、壁際に棚があって、そこへチェストという小さい木の箱を貸与されて小物を入れるんです。腕時計とか歯ブラシとか手拭い、そういう小物入れです。それがずっと並んでおるんです。

出撃しておらんようになつたら、そのチェストを下ろして、行李の中へ詰めて親元へ送り返してやるから空いている。

西山 いなくなった人の分は。

川西 ぼろぼろと歯が欠けたように。

ある男がそれをバスガールの物まねをして、「混み合いますのでお詰め願います」と言って詰めたなら、別の男が突然後ろから殴りかかったんです。それでけんかになった。我々はびっくりして、さっと止めたらずぐ止まったんです。「俺が悪かった」「俺が悪かった」と両方とも言う。情緒不安定ですね。

私もそういう状態、同じような状態でした。

腹が立って突然、木の枝を軍刀で切ったりするやつがおりました。

それから、やくざのまねをよくしていました。自己紹介するのに「しがねえやっこでござんす」とか、「向後万端よろしゅう引き回しのほどお願いします」とか、そんなことを言うやつがようけおって、敬礼するのも、まともな敬礼をしないで、「おす」というような調子で。

西山 崩したりするわけですね。

川西 話をまとめてみると、本気になって戦争しておらなんだということや。一言で言うと。しかし世の中の人、特攻隊へ行ったと言ったら、忠君愛国もええとこですね。熱烈たる愛国者じゃなかったかと。真逆さまです。

西山 そうすると、負けてよかったみたいな感じもありましたか。

川西 それはうれしかったですよ。終戦の勅語を聞いたときには、浮き浮きました。がっかりして、「俺も腹を切る」とかなんとか言うよう

な者もありましたけれども、私は全然そんなことはなかったです。

西山 ありがとうございます。とても興味深いお話でした。

[註]

(1) **中村賢二郎** 中村賢二郎 (1925~)。西洋史学者。1977年京都大学人文科学研究所教授。

(2) **こちらの文章** 前述の川西氏による「夜汽車の思い出」のこと。このなかで川西氏は母親について次のように記している (229頁)。

母も戦争が嫌いだった。当時英霊が帰ると町内会や婦人会で迎える習慣になっていた。近所に息子を戦争でなくしたオバサンがいて、英霊を受け取るとき私は泣かずにいられない、どうしたらよいか母に相談した。母は即座に「泣きなさい。大声で泣きなさい。かわいい息子を一銭五厘で召しあげ、白木の箱で返す法があるもんか」とタンカを切っていた。

このエピソードについては、本聞き取りの後半でも川西氏が触れている。

(3) **藤山愛一郎** 藤山愛一郎 (1897~1985)。実業家、政治家。1934年大日本精糖社長就任。

(4) **小西秋雄** 小西秋雄 (1923~2011)。実業家。1948年京都大学法学部卒業。1987年新キャタピラー三菱社長就任。

(5) **竹山康之** 竹山康之 (1923~1945)。大阪府立住吉中学校より1942年4月に大阪高等学校入学 (文科2組)。1943年12月陸軍入隊。服役中の1944年10月に京都帝国大学経済学部に入學するが、実際には通うことなく1945年6月10日にフィリピンで戦死した。竹山の日記・書翰などを収録した『戦没学徒 竹山康之の記録』が、大阪高等学校の同

窓生正田邦夫・柊和典によって編集され刊行されている (2003年、非売品)。

(6) **清水幸義** 清水幸義 (1925~2015)。高等学校教諭、小説家。戦時中の大阪高等学校における学園生活を描いた「学徒出陣」が『文学界』1964年9月号に掲載された (昭和戦争文学全集編集委員会編『昭和戦争文学全集11 戦時下のハイティーン』集英社、1965年、に再録された)。なお「学徒出陣」によれば、清水は「幼いころに患ったポリオの後遺症が原因」で徴兵検査は丁種不合格となった。

(7) **土浦にも空襲があって、何人か同期生が亡くなっている** 1945年6月10日、米軍機が土浦海軍航空隊を空襲し、第15期予備学生出身者15名を含む多数が戦死した (小池猪一編著『海軍予備学生・生徒 第1巻』国書刊行会、1986年、169頁)。

(8) **桜花** 海軍が開発した特攻兵器。爆弾を装備した滑空機で、一式陸上攻撃機に敵近くまで吊り下げられ、同機から離脱後ロケットエンジンで進み体当たりすることが想定されていた。1945年3月21日に、沖縄を攻撃中の米軍に向け初出撃した。

(9) **厚木の航空隊が反乱を起こした** 1945年8月15日、厚木にいた第302海軍航空隊の小園安名大佐らが降伏を受け入れないとして反乱を起こしたが鎮圧された。

(10) **西大寺鉄道** 西大寺と後楽園を結んでいた軽便鉄道。1962年廃止。

(11) **「わが青春に悔なし」という映画** 1946年東宝製作。監督黒澤明。大河内傳次郎は、原節子演じる八木原幸枝の父親役を演じた。

(12) **「素浪人罷通る」という映画** 1947年大映製作。監督伊藤大輔。主演阪東妻三郎。水谷八重子の夫守田勘彌も出演している。

(13) **タカノヤ** 漢字表記不明。